

児童生徒の学びをつなぐ「中学校区外国語部会」を軸とした 小中連携の実践

新井千鶴・高橋 望

群馬大学教育実践研究 別刷

第38号 329～338頁 2021

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

児童生徒の学びをつなぐ「中学校区外国語部会」を軸とした 小中連携の実践

新井 千鶴¹⁾・高橋 望²⁾

1) 富岡市立妙義中学校

2) 群馬大学大学院教育学研究科 教職リーダー講座

A study of implementing educational continuities from elementary
through lower secondary levels focusing
on “the English subcommittee within a school district”
for connecting the learning of every student.

Chizuru ARAI¹⁾, Nozomu TAKAHASHI²⁾

1) Myogi Junior High School, Tomioka

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：小中連携、外国語部会

Keywords : school collaboration, English subcommittee

(2020年10月30日受理)

1. 課題の設定

1-1. 研究の背景

(1) 小学校における外国語科導入に伴う小中での教育課程編成の必要性

2017年告示の学習指導要領では、小学校高学年で年間70単位時間の教科として外国語科が導入されることとなり、指導計画においては、中学年及び中学校との接続に留意することや「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の5つの領域別に実際のコミュニケーション場面での活用を意識することが求められている。また、題材や場面設定の配列を工夫したり、系統的な指導が行えたりするよう、指導方法や学習環境に配慮したりする等、児童の発達段階や学校・地域の実態に応じた指導計画の作成が求められている。

中学校学習指導要領では、小学校や高等学校におけ

る指導との接続に留意し、既習の学習内容を繰り返し指導することで定着を図るため、小学校でどのような指導が行われているのかを把握することが重要とされた。

文部科学省「平成30年度英語教育実施状況調査」によれば、約8割の中学校で外国語科における小中連携が行われている。多くの学校で「情報交換（授業参観等）」や「交流（授業参観後の研究協議、中学校教員による小学校での授業等）」が行われている。一方、「小中連携したカリキュラムの作成」については、取組の難しさが確認される。特に小学校高学年においては、小学校の学びを中学校へ円滑に接続させるため、乗り入れ授業、カリキュラムづくりの連携、CAN-DOリストの作成、等の具体的な連携の取組を充実・強化していく必要性が指摘されている。

(2) 勤務中学校区における小中連携の現状

勤務校であるA中学校は、B小学校とC小学校から

生徒が入学する2小1中校区である。いずれの学校も単学級で教職員数も少ない。相互授業参観を行ったり、乗り入れ授業をしたりするには、困難な現状がある。6年生の担任が中学校の授業を参観する形式で2回の情報交換の機会（6年生による中学校一日入学での授業参観、入学後の中学一年生の様子確認のための授業参観）はあるが、授業後の研究会は行われていない。校長・教務主任・養護教諭による3校合同会議を定期的に開催し、学校行事や教育課程の確認、児童生徒の情報交換、等を行っているが、連携は十分とはいえない。

2018年12月（研究実践を行う前年）に行った校区内全教員を対象とした小中連携に関わるアンケートでは「中学校の先生は小学校の授業を見た方がよい」「小学校でも中学校の専門の先生に授業をしてもらいたい」「理科や数学などの授業を小学校ではどのように授業をし、どのように学んでいるのか実際の授業を見てみたい」等、授業に関わる要望が多く挙げられた。

また、A中学校管理職へのインタビューから、中学校教員が小学校の授業に関わったり、児童と接する機会を持ったりすることは、教員の指導力向上や児童生徒の学力向上にも寄与するという考えから、10年ほど前にA中学校の教員をB小学校と兼務させようとしたことがあったが、実現できなかったことが明らかになった。理由として、時間割の相違、打ち合わせ時間の確保の困難、等が挙げられていたことが明らかになった。

小中連携の必要性は実感しながらも、実現できていない現状が指摘できる。

1-2. 先行研究の検討

外国語科に焦点をあてた小中連携に関する先行研究として、例えば高野ら（2014）は、外国語教育における最大限の効果を生むためには、小学校と中学校の有機的連携が重要であると指摘する。そのために、小中の教員が、相互の教育内容を理解した上で指導を行うことが不可欠であり、小学校では中学校から寄せられる小学校英語への期待に沿った活動を意識し、中学校では言語活動を中心として英語を身につけてきた生徒の能力をさらに伸ばしていくよう心がけることが求められる。さらに、英語教育の経験を持たない小学校教員が従来の職務に加えて外国語教育を担当するからには、人員確保や教材・機材の充実といった支援体制を

整備することが重要となることを指摘している。

小中連携の重要性について川上（2010）は、中学校教員にとって、小学校外国語活動の必修化は英語教育をより充実させることのできる好機であり、この変化に対応しなければ、英語好きの児童を中学校での英語で失望させてしまう恐れがあることを指摘する。そして、小学校での学習を中学校英語に効果的につなぐためには、小中連携だけでなく、同時に中学校区内での小学校同士の格差をいかに少なくするか、つまり小中連携をいかに充実させるかもまた、重要な観点であるとしている。

他方、川上は、中学校教員が小学校へ行き、授業を参観したり、実際に授業に入って小学校教員と一緒に教えたりすることが、中学校での英語教育を充実させることにつながるとし、相互授業参観や乗り入れ授業の必要性を指摘する。文部科学省による調査によれば¹、中学校教員が小学校で乗り入れ授業を行う科目は外国語活動が一番多いことが明らかとなっている。

田中（2018）は、小中教員の相互乗り入れ授業実践が、次年度入学予定の児童の学習や生活の様子を毎週見取る機会となり、中学校教員が具体的な生徒像を持つことができることを指摘する。中学校教員が「何を、どのように学んだ児童が入学してくるのか」を理解した上で、中学校3年間を見通した学習目標を設定し、授業づくりの工夫をできることが乗り入れ授業の最大のメリットとし、児童の学習経験を生かした中学校の授業の展開は、児童生徒にとって少ない負担で繰り返し学ぶことを可能にし、力を定着させることにつながると述べている。

萬屋ら（2013）は、「目標の一貫性」「指導法の継続性」「学習内容の継続性」の3つを挙げ、カリキュラム連携について言及している。中でも「指導法の継続性」は、中学校外国語科の入門期に重視される必要があるとし、小学校外国語科で児童が経験した活動や教材を活用することで、小学校外国語科と中学校外国語科のつながりが感じられると述べている。また、各学校での取組を通して現場でのアイデアを出し合いながら、カリキュラムを作成する作業は学校にとって大きな意味があり、一貫性のあるカリキュラムの開発を目指す必要があると指摘している。年間目標を決定し、その達成のための指導内容を選択・配列するためのシラバスづくりが求められ、さらに目標が達成されたか

を評価・確認することも求められるとし、学校で作成したカリキュラムの評価も行いながら、小学校外国語科を中学校外国語科にどのようにつなげるかが今後の課題となることを指摘している。

中学校学習指導要領では、外国語科の目標について各学校段階の学びを継続させるとともに「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から改善・充実を図り、学習到達度目標を5領域別に設定することが示されている。CAN-DOリストにおいても、学習到達目標を設定する意義や方法を理解し、年間指導計画・単元計画の作成、学習評価において活用され、学校の指導改善につながる取組とする必要性が述べられている。

吉村ら(2016)は、評価項目の分類については様々な視点での捉え方が可能なため、各学校の外国語担当教員全員が、生徒の実態を踏まえ、育成したい能力や生徒像に基づいて設定すること、そして指導者が具体的な目標を持って指導計画を立てることや生徒の学びの見取りの観点を明確にすることの重要性を指摘している。

以上のように、先行研究から、外国語科を中心に小中連携を進めていくためには、乗り入れ授業等の実践を含め、小学校、中学校の両方の教職員がお互いの授業形態、指導観等について理解をすること、小中連携だけではなく中学校区における小小連携の視点も持つこと、児童生徒の学びのつながりを充実させるためにも連続性を持ったカリキュラム開発を行うこと、目標・評価においても関連性を設定すること、等の観点が導かれる。

1-3. 研究の目的

以上から、本研究は、勤務校区の実態、及び先行研究での指摘を踏まえ、勤務校区における小中間の連携関係を促進することで児童生徒の学びのつながりを充実させることを目的とする。その際、小学校外国語科が導入されたことに鑑み、「3校外国語部会」を設定し、外国語科を中心として実践を進めていくこととする。

2. 研究実践

本研究は、2年をかけて実践した(2018～2019年度)。2019年度に本格的な実践を行うこととし、2018年度からA中学校及び校区のB小学校とC小学校に対する働きかけを行い、実践の素地作りを行った。

2-1. 研究の方法

萬屋ら(2013)は、小中連携の視点として、①「情報交換(互いの取組・実践を情報として交換する)」、②「交流(中学校教員による小学校での授業)」③「カリキュラム開発(教育課程編成や小中連携したCAN-DOリストの作成)」の3つを掲げている²。本研究は、これまで小中の関わり合いがほとんどなかった本中学校区の実態に鑑み、④「実践共有(校務支援システムC4thを用いた情報共有)」を加え、連携の状況を3校全教職員で共有化することとした。本研究は、4視点を軸に、外国語科を中心に小中の連携を充実させるべく研究に取り組んだ。

2-2. 3校外国語部会の設置とその活動

4視点から本研究を円滑に進めるため、3校の外国語主任、中学校長から成る「3校外国語部会」(以下、部会)を設置した(図1)。筆者は、中学校の外国語主任として参加することとした。

部会の設置に向けて、2018年度から各小学校外国語主任に対する働きかけを開始した。3校の外国語科指導の現状を互いに理解し合うため「情報交換」から開始した。

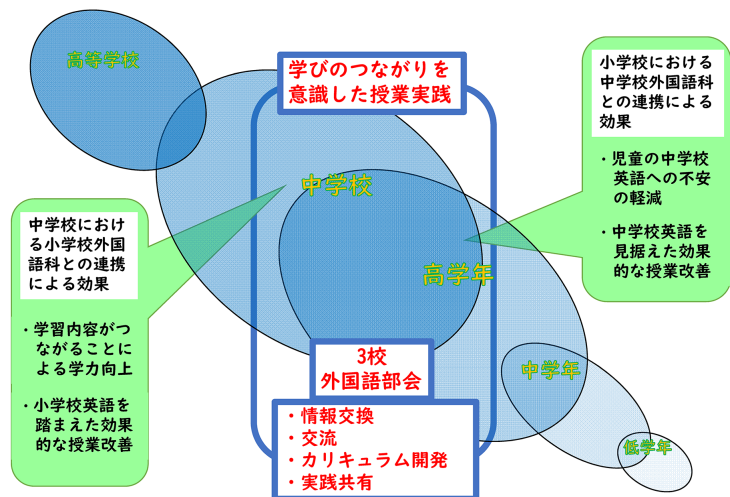


図1 3校外国語部会のイメージ図

○第1回部会（2018年12月20日）

移行期間となっている2019年度の準備状況、各小学校での取組の様子や移行期用教科書「We Can」での指導案作りについて、両小の主任から意見をうかがった。今までは、ALT主導で行われていた外国語活動が、昨年あたりから担任主導で行うようになったこと、校内研修で指導法を勉強している学校もあるが、移行期時数の50～70時間の生み出し方も学校によって違っており、学校間の差が大きいとの意見が出た。また、5・6年生の移行期用教科書の内容は難しく、指導内容が多いことに加え、付属CDが速くて聞き取れず、英語嫌いを増やしてしまうのではないかと心配であるとの意見も出された。

小学校教員にとっては教科書の内容も不安なことのひとつだと言う。小学校の実態を全く知らなかった筆者にとって、部会での情報交換は非常に興味深く、中学校教員としてこの移行期間に何ができるのかについて考えるきっかけとなった。

○第2回部会（2019年4月9日）

部会は、両小主任が定期的に中学校に集まり、5・6年生の授業実践についての確認や小中連携の在り方の見直しをすることとなった。

「1学期の外国語科での小中連携について」検討した。中学校教員の小学校への訪問予定と指導内容及び3校での連絡方法を整理した。筆者が隔週で各小学校を訪問し、5・6年生担任と一緒に授業を行うこととなった。部会でのやりとりや5・6年生の授業内容の共有については、C4th内の「中学校区内掲示板」を活用し、3校全教職員に報告することで「実践共有」をすることとした（図2）。

○第3回部会（2019年6月7日）

「4・5月の実践の振り返りと中学校での取組について」検討した。各小学校への訪問を効果的にするために、隔週ではなく1ヶ月の前半2週をB小、後半2

週をC小にする案が小学校から提案され、6月以降に変更することとした。当初、指導案等の共有はC4thを活用することを予定していたが、小学校からFAXの方が確実であるとの提案があり、以降、FAXを活用することとした。

また、小学校での授業をしたことで気づいたことをもとに、中学校1年生の授業の改善を行ったことについても報告・共有した（図3）。



5年生の授業では、「When is your birthday?」の2時目ということで、自分の誕生日を中学教員の質問に答える形式で伝える活動をした。序数は未習のため「My birthday is in ○○○.」という練習の後、一人ずつチャレンジし、全員が答えることができた。来週には序数の学習に入るため、「聞くこと」の活動では、児童のよく知っているキャラクターの誕生日と欲しいものについて支援員と中学校教員でやりとりをし、メモを取ることにした。

児童は、○月○日の言い方がただの数字ではないことに気づいた様子であったが、本時では全くそのことには触れず、板書のみとした。



6年生の授業では、We can2の教科書で何度か見たり聞いた日本文化について、英語で何と何のかを確認した後、「ジョバディゲーム」という聞き取りのアクティビティを行った。

既習表現に交じって、未習表現も出てくるが、前後の文脈や単語から、何について説明しているのかを推測し、答えようとする姿が見られ、単元の終わりの復習ができたと言える。

班別の活動であったため、英語への不安のある児童も一緒に参加できたのではないかと考える。

この単元は日本文化を英語で紹介する英文が多く出ているが、そもそも日本文化についてよく知らなければ理解できないだろうと思う。アクティビティを作るうえで、児童がどの程度日本文化について日本語で説明できるのかと思った。小学生は「あやとり」はやったことがあるのか?「だるまおとし」で遊んだ経験はあるのだろうか?と考え、児童の実態を把握することの必要性を感じた。

英語の能力というより、児童の経験を授業にうまく取り込むことが大切であり、担任の先生との連携が大事であると改めて思った。

図2 C4th掲示板での連携授業内容の共有

「書くこと」については、ペンマンシップを用いているが、小学校時のものと同じにならないよう、教科書準拠のものを使用している。アルファベット→単語→Lesson1の書き写しまで1冊でできるようになっており、小学校の時には書かなかった単語や英文（教科書本文）の書き方が分かりやすく説明されていて学習しやすいといえる。小学校のペンマンシップを見せていただいたが、中学校で使用しているものと似ていて、生徒は大きな差を感じることなく「書くこと」の学習に取り組んでいると思う。

アンケート結果からみると、現時点で生徒が「差」として感じているのは授業中の教師の英語量だと言える。小学校の授業では、ALTが主に英語で話し、担任はあいさつやクラスルームイングリッシュなどは英語で話すが、児童が困ったときには日本語で解説や説明を行っている。担任がいるという安心感から、児童も質問を日本語でできる環境である。しかし、中学校ではALTも日本人英語教師もずっと英語を話しているため、分からなかったときに誰に質問したり、助けを求めればいいのかに困っているのではないかと考える。

生徒にとって「ギャップ(差)」を「ステップ(成長)」と感じることができるよう、授業を工夫する取り組みは、これからが本番であると思う。



図3 中学校の授業改善についてのまとめ

○第4回部会（2019年7月31日）

「1学期のまとめと2学期の実践について」検討した。小学校での外国語科の授業は、1、2校時に設定されていたが、昼休みや放課後を使って打ち合わせが可能となるため、5、6校時に変更することとなった（図4）。また、中学校教員の授業日は単元の復習になるように計画し、まとめの授業をする形になった。

毎回の部会に5・6年生担任が参加することは困難を伴う。そのため、長期休暇中（8月）に、筆者が各小学校を訪問し、筆者、当該小学校主任、当該小学校5・6年生担任で、連携の在り方について検討する機会を持った。部会は小中連携だけでなく、小小連携の場にもなっているので、定期的に開かれることはよいとの意見が各小担任から出された。

○1学期の職員アンケート（2019年8月）

1学期の取組を振り返るため、3校全教職員対象のアンケートを実施した。結果は、部会で項目ごとにまとめ、3校のC4th掲示板に示し、小中連携に関する教職員の考えや外国語部会の取組の認識について共有できるようにした。例えば、「5・6年生の実態の違いを中学校教員は理解してほしい」というような不足している情報を補うためのヒントが得られたり、「高学年だけでなく、他の学年の外国語活動も見に来てほしい」という、小中連携だけではなく外国語学習の意欲向上のための連携にしてほしいと考える教員がいたりすることが明らかになった。

○第5回部会（2019年12月19日）

「2学期のまとめ及び小小での情報交換について」検討した。2学期の実践では、予め指導案にて授業内容が各自確認できるため、自分の授業での役割や児童の実態にあわせた授業作りができていてよかったとの感想が各小主任よりあった。筆者がT1で行う授業は、児童にとっても緊張感を持って臨むことができていたので3学期以降もこの形でできるとよいとの意見が出された。

また各小主任同士を中心に、中学校版CAN-DOリ

*5・6校時の基本		小学校名	5年生内容	6年生内容
9月	6日（金）		Unit4 What time do you get up?	Unit5 My summer vacation.
	13日（金）		Unit4 What time do you get up?	Unit5 My summer vacation.
	20日（金）		Unit4 What time do you get up?	Unit5 I like my town.
	27日（金）		富岡甘藷中学生スピーチコンテスト開催のための連携授業はできません。	
10月	4日（金）		Unit5 She can jump high. He can run fast.	Unit4 I like my town.
	11日（金）		Unit5 She can jump high. He can run fast.	Unit4 I like my town.
	18日（金）		連携授業なし	
	25日（金）		Unit5 She can run fast.	Unit6 What sport do you want to watch?
11月	1日（金）		Unit6 I want to go to Italy.	Unit6 What sport do you want to watch?
	8日（金）		Unit6 I want to go to Italy.	Unit6 What sport do you want to watch?
	15日（金）		Unit6 What sport do you want to watch?	Unit6 What sport do you want to watch?
	22日（金）		大学院課題研究会および授業公開（5校時授業、6校時発表会）6年生Unit6のまとめ	
	29日（金）		大学院課題研究会および授業公開（5校時授業、6校時発表会）6年生Unit6のまとめ	
12月	6日（金）		英語でクリスマスカードを作ろう	英語でクリスマスカードを作ろう
	13日（金）		外国のクリスマスを知ろう	外国のクリスマスを知ろう
	19日（木）		第4回外国語部会「2学期のまとめと3学期の予定等」	

図4 部会で決定した訪問予定

ストに合わせる形で、小学校卒業時の目標達成に向けたCAN-DOリスト作成に着手した（後述）。来年度は、市で採択した検定教科書を用いることになるため、新しい単元に合わせて、CAN-DOリストの見直しが必要になることも確認した。

2-3. 小学校における中学校教員と学級担任及び支援員とのT.T授業実践

1学期、筆者は担任主導の外国語活動にT2として参加していた。しかし、部会での検討を経て、2学期よりT1として授業を行うことになった。そのため、ALTや支援員との事前の授業打ち合わせはメールや電話で行い、指導案を作成することとした。隔週授業での指導案作りは、授業の連続性から内容の把握が難しいことが予想されたため、筆者の授業は、児童が必要感を持って取り組むことができる既習事項を用いた言語活動を中心とする授業とした。また、授業を5、6校時に変更したことで打合わせが確保できるようになった。

指導案は、担任、支援員、筆者の3人のやりとりが分かるように書き、言語活動の説明などで使う英語も表記しておくことで、一緒に打ち合わせをしなくても授業の流れが分かるようにした（図5）。このことにより、担任はどのような英語で説明されるのかを事前に把握できるため、児童へのフォローの方法をあらかじめ考えることができたり、担任だけの授業時でも同じ英語表現を使って説明ができたりするなど外国語活動の授業の充実につながったと考える。授業では、既習表現のさらなる定着を図るため、自作教材を使用した。

9月13日(金) 6年生 Unit5 My summer Vacation (we can2 for 6th grade)

めあて: 自分と友達の夏休みについて英語で伝えることができる。

準備: テレビ、パソコン、やり取り用プレゼンシート

活動activity	担任H.R.teacher	ALT	Arai
あいさつ Greeting Students' reaction	日直さんの確認 Stand up. Let's start English class.	2, Hello, How are you today? I'm happy today, and you?	1, Good afternoon boys & girls. Good afternoon, Ms Arai.
復習 Review & icebreak "Friends game"	3, How's the weather? It's cloudy.	Demonstration Ms Arai *What sport do you like? I like volleyball. *What animal do you like? I like lions and pandas.	Now, let's play Friends game. Today's topic is about sports & animals. I like table tennis. What sport do you like? I like dogs and cats. What animal do you like? Oh nice.

My summer vacation Name: _____

☆自分の夏休みについて英語で発表しよう。友達の発表を聞いて、メモを取り、友達の夏休みについてみんなに伝えよう。

I went to _____

I enjoyed _____

I ate _____

友達の発表をメモしよう。日本語でメモを取り、後で英語にしてもOK。

(友達の名前) _____'s summer vacation

(友達の名前) _____ went to _____ (日本語メモ)

(友達の名前) _____ enjoyed _____ (日本語メモ)

(友達の名前) _____ ate _____ (日本語メモ)

友達が好きな食べ物
It is _____

図5 学級担任、支援員、筆者の役割を記載した指導案と自作教材の例

自作教材は、実際のやりとりで児童が言いたい言葉を担任と精査しワークシートに載せておくなど、教科書にはない表現を入れられることも効果的であった。その教材を用いることで、児童の主体的なコミュニケーションにつながったと言える。

2-4. 外国語科のカリキュラム開発

(1) 3校共通CAN-DOリストの作成

小学校での外国語科導入において、外国語を用いて何ができるようになるのか、どのように中学校につながっていくのかという視点を指導者が持つことは重要となる。そこで、中学校区で小学校3年生から中学校3年生までの到達目標が書かれたCAN-DOリストを作成することで、外国語科を指導する教員が、各学年の到達目標を共有化できると考えた。2020年4月より運用できるよう、第5回部会において検討を行った

(図6)。

到達目標が明確になると、目標達成の様子を確認するためのテストや作品作りをどのように行うのかの議論が必要となる。児童生徒のそれぞれの学びがつながるための工夫が求められる。例えば、英語での自己紹介、他者紹介の単元で行われる言語活動では、小学校からの学びがつながるよう連携を図る。小学校で、情報カードをもとに架空の人物の情報を英語で伝える活動を行った場合、中学1年生では、実在する人物(先生や芸能人など)の情報を集めて、即興的に簡単な英語で伝え合うというように、同じことを繰り返すのではなく、つながりを考えた言語活動を行うことが可能になる。

(2) 3校共通教材の作成と活用

移行期用教科書「We Can」は、付属のデジタル教材も充実しており、初めて外国語科の授業を受け持つことになった担任でも授業を進めやすく、また児童にとっても映像と音声と同時に流れるので理解しやすく、楽しい教材であると言える。しかし、教科書で学んだ基本表現を用いて自分が本当に伝えたいことを表現

していくためには、児童の身近にある地域の情報や見たいものについての英語表現も必要となる。そこで筆者は、児童が本当に伝えたいことを英語で伝えられるようになるために、担任、支援員、ALTとともに、児童が興味関心を持って取り組める教材作りを行った。

例えば、6年生の「Unit4 I like my town」では、町にある施設名や児童が町にあったらいいと思う施設名などもワークシートに加えて練習したり、「Unit6 What do you want to watch?」では、たくさんあるオリンピック競技種目の中から児童の習い事等の経験を踏まえて興味関心の高い競技を担当に選んでもらい、活動の中に多く取り入れる工夫をした。また、中学校においても、小学校の授業で用いた教材で、オリンピックに関する興味関心を高める授業を行った。6年生と中学生が同じ教材を通して外国語を学ぶことにより、中学校外国語科の教育実践を円滑に進めること

ができると考える。

これらの教材は、C4thの掲示板に掲載し、3校の教職員が自由にダウンロードして使用できるようにした。

(3) 外国語科での小中連携による授業実践の共有化

小中連携への理解促進のためには、3校の教職員が情報共有することが必要であると考え、本研究では「実践共有」にも注力してきた。

外国語授業で使用した指導案や教材、児童の様子や授業の内容を記した実践のまとめを、毎週C4thの校区内掲示板に掲載し、外国語科での取組として公開した(図7)。掲示板の機能に「既読」の確認ページがあり、毎週多くの教職員が、外国語科での小中連携実践を閲覧していることが確認できた。小学校教員からは、「外国語科のような小中連携を他の教科でもやってもらいたい」という意見が出された。また、中学校教員からは、「外国語科での取組は、生徒指導上の児童生徒理解にも寄与する取組であり、互いの情報交換の場としても意義ある取組ではないか」という意見が出された。

3. 研究の成果

本研究以前、授業実践を通じた教職員同士の意見交流の機会はほとんど行われていなかったことを考えると、中学校区での教科連携について、3校の教員(外国語主任、5・6年担任)が協働で授業実践を行ったり、部会を通じて意見交換したりできたことは、大きな成果と考える。

本研究の成果を検証するため、2019年12月に3校の全教職員、及び各小学校の6年生にアンケート調査を行った。

【中学校卒業時の目標】既習表現を用いて、話題に応じたスピーチをしたり、まとまった英文で伝えたいことを表現したりできる			
外国語表現の能力		外国語理解の能力	
読むこと やりとり	書くこと	聞くこと	読むこと
発表	発表	○要点理解☆概要理解	○要点理解☆概要理解
第3学年:社会的な話題や伝えたいこと等について、まとまった英文で伝えあうことができる			
・話題に合わせて会話をし、内容を深めながらやりとりを2分程度続けることができる。	・社会的な話題や自分の伝えたいことについて、既習表現を用いて8文以上の適切な英語で伝えることができる。	・既習表現を正しく用いてインタビューや文化紹介の英文を80語〜100語程度の英文で書くことができる。 ・まとまった英文を読んでその要約文や感想を英語で書くことができる	○身近な話題やアナウンスなどを聞いて理解することができる。 ○先生や友達が発す英語を聞いて内容を理解することができる。 ☆既習単語をヒントに類推しながら内容を理解することができる。
第2学年:将来の夢や日常的な話題について、自分の考えをまとめ、英語で伝えることができる			
・相手の話した内容に対して質問したり、答えたりして英語での会話を1分程度続けることができる。	・将来の夢や身近な話題について、自分の考えを5〜8文程度の英語で伝えることができる。	・既習動詞を正しく用いて日記や将来の夢等についての英文を25〜50語程度で書くことができる。 ・日常的な話題について自分の考えをまとめ簡単な単語や文を用いて25〜50語程度で書くことができる。	○50〜70語程度の日常的な話題について必要な情報を聞き取ることができる。 ○先生や友達が発す英語を聞いて内容を理解することができる。 ☆既習単語をヒントに類推しながら内容を理解することができる。
第1学年:日常的な話題について、簡単な英語で紹介することができる			
・身近な話題について先生や友達と1分程度英語での会話を続けることができる。	・自分のことや相手のことについて既習表現を用いて、3〜5文の英語で紹介することができる。	・既習動詞を正しく用いて自己紹介や他己紹介の英文を15〜25語程度で書くことができる。 ・日常的な話題について簡単な単語や文を用いて15〜25語程度の英文を書くことができる。	○はったりと話される日常的な話題について必要な情報を聞き取ることができる。 ○500語程度の語彙の意味を理解し読み取ることができる。 ☆既習単語をヒントに類推しながら内容を理解することができる。
会話テスト	スピーチテスト	作品	TFテスト・聞き取りテスト

【小学校卒業時の目標】既習表現を用いて話される英語を聞いて理解したり、決められた話題について初歩的な英語で伝えることができる			
外国語表現の能力		外国語理解の能力	
読むこと やりとり	書くこと	聞くこと	読むこと
発表	発表	○要点理解☆概要理解	○要点理解☆概要理解
第6学年:身近な話題について、簡単な単語や基本的な表現を用いて、その場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができる。			
・基本的な表現を用いて、身近な簡単なことについて、2往復程度のやり取りができる。	・身近なテーマについて、他者に配慮しながら2文程度の英語で話すことができる。	・アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ・音声が十分に慣れ親しんだ簡単な単語や基本的な表現を書き写すことができる。	○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく読み取ることができる。 ○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ☆場面設定や絵カード等を手掛かりとし、慣れ親しんだ単語や表現を英語で読みとることができる。
第5学年:日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な単語や基本的な表現を用いて伝え合うことができる。			
・基本的な表現を用いて、身近な簡単なことについて、2往復程度のやり取りができる。	・身近なテーマについて、他者に配慮しながら2文程度の英語で話すことができる。	・アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ・音声が十分に慣れ親しんだ簡単な単語や基本的な表現を書き写すことができる。	○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく読み取ることができる。 ○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ☆場面設定や絵カード等を手掛かりとし、慣れ親しんだ単語や表現を英語で読みとることができる。
第4学年:自分のことや身の回りの物について、動作をえながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な単語や基本的な表現を用いて伝え合うことができる。			
・自分のことや身の回りの物について、ジェスチャーを用いて伝え合うことができる。	・自分のことや身の回りの物について、実物などを見せながら、簡単な英語で話すことができる。	・アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ・音声が十分に慣れ親しんだ簡単な単語や基本的な表現を書き写すことができる。	○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく読み取ることができる。 ○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ☆場面設定や絵カード等を手掛かりとし、慣れ親しんだ単語や表現を英語で読みとることができる。
第3学年:サーボを受けて、自分や相手、身の回りの物に関する事柄について、簡単な単語や基本的な表現を用いて伝ええることができる。			
・自分のことや身の回りの物について、ジェスチャーを用いて伝え合うことができる。	・自分のことや身の回りの物について、実物などを見せながら、簡単な英語で話すことができる。	・アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ・音声が十分に慣れ親しんだ簡単な単語や基本的な表現を書き写すことができる。	○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく読み取ることができる。 ○アルファベットの大きな文字・小文字を正しく書くことができる。 ☆場面設定や絵カード等を手掛かりとし、慣れ親しんだ単語や表現を英語で読みとることができる。
会話テスト	スピーチテスト	作品・ワークシート	TFテスト・聞き取りテスト

図6 部会作成のCAN-DOリスト

カテゴリ	中学校区連絡掲示板
作成者	新井 千鶴
タイトル	中学校区外国語科での連携授業の実践について(報告)
本文	<p>中学校区外国語科での連携授業では大変お世話になっております。 (金)に 小学校で第1回目の連携授業が行われました。</p> <p>新学期スタートのお忙しい時期であり、午後には授業参観が予定されていた19日に、外国語活動の授業に参加させていただきましたこと感謝いたします。ありがとうございました。</p> <p>元気いっぱいの子供たちのおかげで、楽しい外国語活動に参加させていただきました。</p> <p>笑顔いっぱいであけてきた外国語活動を中学校の英語の授業にどのようにつないでいけるのかと考えるきっかけになりました。</p> <p>今後ともご指導よろしくお願いいたします。</p> <p>中 外国語主任 新井千鶴</p>
リンク	
添付書類	小学実話(新井千鶴) 一括ダウンロード
更新日	23 09:53
公開期間	2019/04/23〜2019/04/26

図7 C4thの中学校区掲示板の活用例

3-1. 教員アンケート結果

中学校区3校で教科を通じた連携を行うことに対して、肯定的な意見が多いことが分かった。小学校教員

から、部会が小小連携の場にもなっていることや他教科での連携もできればよいとの意見が確認されたことは、本研究の成果と捉えられる。学習意欲や学力向上の面だけでなく生徒指導面においても効果があるのではないかとの意見もあり、教科での小小連携をさらに進めることで、児童生徒への指導のつながりもできてくることが期待できる。

また、授業作りに関して、中学校教員との役割分担ができつつあること、中学校教員の持つ外国語指導のノウハウと小学校教員の実践している学級経営のノウハウをうまく組み合わせることができてきた、との意見が出た。

一方で、今後の展開については、小小連携を続けることで生じる担当教員の負担の大きさを懸念する意見もあり、外国語科の専科教員の配置を望む意見が多く出された。

3-2. 児童アンケートの結果

「授業が楽しかったか」「難しかったか」という質問に対する児童の回答とその理由は図8のように整理で

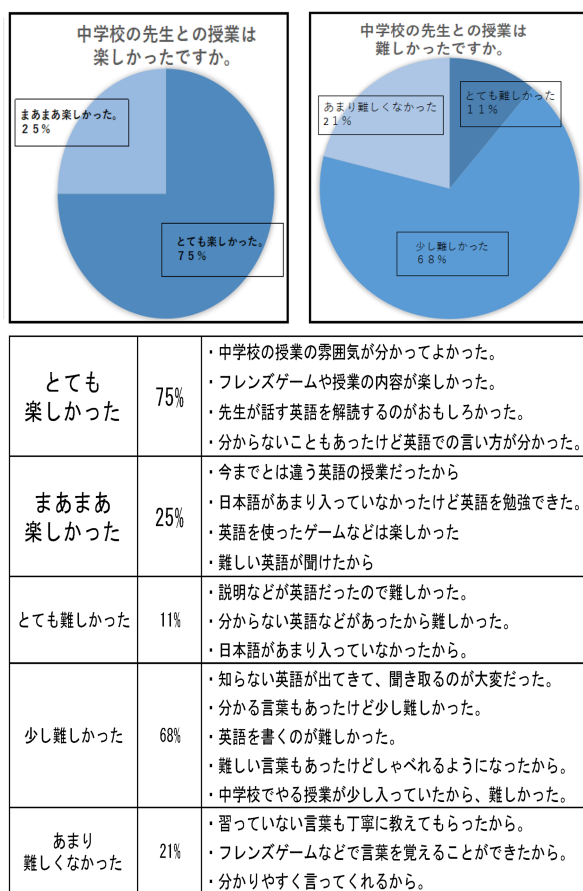


図8 児童によるアンケート結果①

きる。

児童は、アクティビティなどで生じる外国語科授業の楽しさだけでなく、英語で話される内容について、分かる部分や話の流れから推測して理解しようとするこへの楽しさを感じていたと言える。月2回の訪問であったため、担任の授業と中学校教員の授業の相乗効果もあったと言える。英語で話される内容を理解できた経験は、英語学習への意欲を高め、中学校英語への期待となったと考えられる。

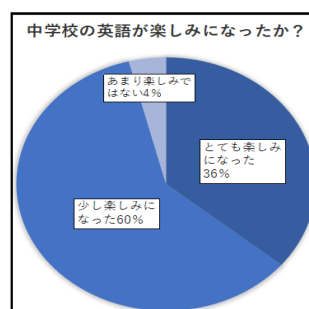


図9 児童によるアンケート結果②

中学校英語への期待度を問う質問では、ほとんどの児童が「楽しになった」と回答し（図9）、その理由として「中学校ではこのように授業をしていくのかということが分かった」や「先生が英語で進める授業が楽しかった」と答えた。多くの6年生にとって、中学校進学は不安の多いものであると推測するが、授業への不安感も大きいと考えられる。教科による小小連携が進むことで、児童の中学校進学への不安払拭につながることは、これらの結果からも確認できる。

4. 研究の課題

本研究の課題として、以下の2点が挙げられる。

一つ目は、小学校外国語科の授業に中学校教員が関わるためには、人事的側面からの支援が必要ということである。2019年度は小学校で授業ができる「兼務教員」制度を利用した。しかし、特配等の人事的支援は得られなかったため、中学校での通常時数に加える形で、2つの小学校での授業をT1として行うことになり、移動時間を加えると、業務量の増加があった。今後、小学校での外国語科指導充実のために教科での小小連携を考えた場合、人事的側面からの支援をどのように得られるかが課題となると考える。

二つ目は、複数の学校の教員が、定期的に行われる連携授業をするための打ち合わせ時間をどのように生み出すかということである。本研究では、対面での打ち合わせの機会や時間を確保することが困難であったため、C4thの活用を試みたが、途中でFAXに変更するなど授業作りの面では十分に機能しなかった。授業者同士で集まり、相談できることがよりよい授業作りにつながることは本研究実践からも指摘できる。校区内の管理職や教務主任等とも相談し、打ち合わせ時間を確保するための仕組みが必要と考える。

5. 今後の展開

2020年度の校区内外国語科による小中連携は、上述課題を解決しながら始まった。一つ目の課題を解決するために、中学校に英語科の加配教員が配置された。二つ目の課題を解決するため、中学校教員がTIとして小学校外国語科の全ての授業を行うことにし、担任との打ち合わせ時間の縮減を図った。

昨年度の中学校教員による外国語科授業を児童生徒がどのように感じたかを確認するため、2020年6月、6年生（昨年度5年生）と中学1年生（昨年度6年生）を対象に、昨年度を思い出してもらう形でアンケートを行った。

6年生は、5年生時の授業について振り返り、95%の児童が楽しかったと回答した（図10）。楽しくな

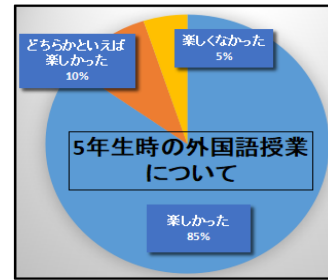


図10 6年生へのアンケート結果

かったと答えた児童は、ゲームなどで勝てないことが多くそれが嫌だったと回答した。「5年生の初めのころは、英語が分からなくて嫌だと思ったけど、先生が楽しく勉強できるように考えてくれたので楽しいと思った。」「オールイングリッシュは難しいけど、いい緊張感があって楽しかった。先生の英語を聞き取ろうと一生懸命になったことがよかった。」という意見が確認された。

筆者は現在、6年生の彼らと週2回授業をしているが、どの児童も意欲的に取り組む様子が見られる。中学校を意識した質問が出るなど、中学校進学への期待を持ちながら授業を受けていると実感できる。

一方、中学1年生は、6年生時の授業について振り返り、小学校に中学校教員が来て授業をすることについて、多くが肯定的に回答した（図11）。中学校教員による乗り入れ授業は、6年生にとって有効と捉えられる。中学校英語への期待度は80%の生徒が楽しみと

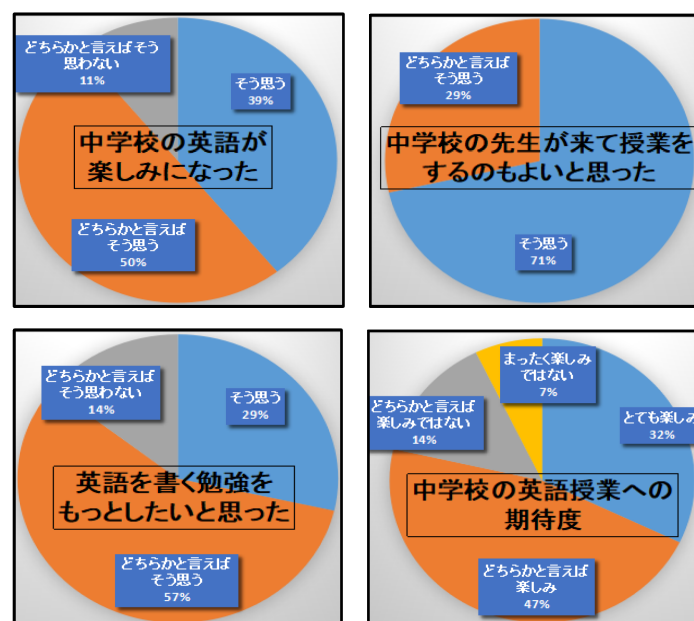


図11 中学1年生へのアンケート結果

回答している。楽しみではないと回答した生徒からは、「テストが難しそう」「覚えることが小学校とは比べものにならないほど多いから楽しみではない」という意見がみられた。

昨年度の6年生は、担任からの要望を踏まえ、中学校を意識した授業を展開してきた。「書くこと」も取り入れ、正しく写して書くことを心がけるよう指導した。その成果が「書くこと」への関心につながっていると考えられる。

今年度は、コロナ感染対策もあり、部会での情報交換は全てC4thを活用して行っている。一度に複数の関係職員同士で情報共有ができるため、小中だけでなく小小の連携にもつながっていると考えられる。

小学校外国語科に関わる中学校教員として、児童生徒の学びを円滑につなぐための校区内外国語科のシステム作りのためには、学校全体の課題としての取組を継続する必要があると考える。なぜならば、校区内の教科連携は、児童生徒の学習意欲の向上のみならず、教員にとっても児童生徒理解や指導力向上に寄与していることが筆者の実感とともに確認されるからである。

小学校で外国語が教科になったとはいえ、特に6年生から中学校1年生への学びのつながりを児童生徒がスムーズに乗り越えるためには、教科担当がそのつながりを理解し、意図的に授業を展開する必要がある。その取組なくして、小学校外国語から中学校外国語への円滑なつながりを児童生徒が実感することは難しい。

本研究の継続的な取組により、小学校での教科担当の円滑な導入にも寄与できると考える。今後も引き続き、中学校区における教科部会を軸とした小中連携のシステム作りを進めていきたい。

付記

本研究実践に関わり、勤務校であるA校、そしてB校、C校の教職員の方々、ALT、外国語指導員に多大なるご協力をいただきました。御礼申し上げます。また、ご指導をいただいた群馬大学教職大学院の矢島正元教授、野村晃男教授に、御礼申し上げます。

註

- 1 文部科学省(2015)「教育課程企画特別部会資料3-4 小学校英語の現状成果課題について」、32頁。
- 2 文部科学省「平成30年度 英語教育実施状況調査」結果について (https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415042.htm、2020年10月29日確認)

主要参考文献

- ・川上典子(2010)「小学校英語教育：小中連携の取組」『鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要』第17号、77-91頁。
- ・高野美千代・加藤宏(2014)「小学校外国語科活動における小中連携の課題と方法」『山梨県立大学国際政策学部紀要』第9号、139-150頁。
- ・田中佳奈(2018)「小中一貫校に学ぶ小学校との連携のヒント」『英語教育』12月号、大修館書店、26-27頁。
- ・吉村美幸他(2016)「福井県英語学習CAN-DOリストの活用ー目標と指導と評価の一体化を目指してー」『福井県教育研究紀要』第121号、87-102頁。
- ・萬谷隆一他編(2013)『小中連携Q&Aと実践小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』、開隆堂。

(本稿は、新井による2019年度群馬大学教職大学院課題研究論文を加筆修正したものである。高橋が全体の調整を行った。)

(あらい ちづる・たかはし のぞむ)